

デ格の意識・逐語訳ダブル対訳コーパス

— 主語化の場合¹ —

加藤 鉦三 (信州大学)

kinoene@shinshu-u.ac.jp

Sean Collin Mehmet (信州大学) sean@shinshu-u.ac.jp

1. プロジェクトの概要

【目的】 本研究の目的は次の2点である。(1)日本語の助詞デを英語にどう訳すのかを、文の動作とデ格名詞を意味的に分類することで機械的に翻訳できるよう分析する。(2)その分析の元となる日本語文(新聞社説)とその英訳を収集し、分類し、それを分析編と意識・逐語訳ダブル対訳コーパス編の2部からなる『デの訳し方辞典』として報告書にまとめる。

【意義・特徴】 新聞社説の英語訳は逐語訳ではない場合の方がはるかに多いため、英語母語話者が逐語訳を用意し、**意識と逐語訳を並べたダブル対訳コーパス**を構築する。これにより、英語教員や翻訳者が自信を持って仕事ができるようになり、また生徒・学生が英作文をする時の強力なサポートとなる。さらに、前置詞に関しては、機械翻訳の大幅な精度向上が期待できる。

本プロジェクトの動機は次の通りである。

A: 英語は前置詞が豊富にある

B: 日本語の後置詞は次の二種類

①意味があるもの: カラ, マデ, へ, ト

②意味がないもの: ニ 「第三の格」という機能しかない

デ 「副詞マーカ」という機能しかない

AとBから、カラ, マデ, へ, ト(と一部のニ)以外の副詞的關係は全てデで表示されることになる。だから、カラ, マデ, へ, トは前置詞とほぼ一対一対応であるが、デは一対多対応であるため、デ格を英訳する時、どの前置詞を当てるかをいちいち考えなければならない。その負担を軽減するためのコーパスを作る。

2. 主語化

日本語原文のデ格が、英語訳文で主語として訳されている事例がある。以下、日本語文が『読売新聞』社説の原文、上の英文が *The Japan News* (読売新聞英語版) の意識英文であり、下の逐語訳が本発表者の訳である。

■ 「手段」のデ

(1) 2016_4_2 **政策的な支援で**、前向きな企業の背中を押すことも大事だ。

Policy assistance is also important to give forward-looking firms a supportive push.

逐語訳 It is also important to give forward-looking firms a supportive push **with** policy assistance.

(2) 2016_7_8 **公的制度で**対応できない部分を地域共生社会によって補う方向性は妥当だろう。

We can say the idea of making up for services that **public programs** cannot provide by building up a community-based symbiotic society is a step in the right direction.

¹ 本研究はJSPS 科研費 16K02917 の助成を受けたものです。

² 加藤(2007)参照。

逐語訳 ... services that they cannot provide **with** public programs

■ イベント・機会ので

(3) 2016_4_6 **国会で**は、国際競争力を高める具体策について、話し合ってもらいたい。

We hope **the Diet** will discuss concrete measures to help enhance the international competitiveness of the agricultural sector.

逐語訳 Deliberations have begun **in** the Diet on how to help enhance the international competitiveness of the agricultural sector.

■ 場所

(4) 2016_4_7 **首都圏の私大で**は、地方出身者らを対象に給付型奨学金を設けているケースもある。

Some private universities in the Tokyo metropolitan area have established a grant-in-aid scholarship program for students who come from non-metropolitan areas.

逐語訳 **At private universities** in the greater Tokyo area, they have established a grant-in-aid scholarship program for students who come from non-metropolitan areas.

3. (G) ALRP

次のペアに見られるように、副詞が形容詞として目的語（等）を修飾するというオプションがある時に限り、英語ではそのオプションがはっきりと優先されるが、日本語では副詞として使う方がどちらかと言えば優先される。この現象を、加藤(2008)では(8)の形で一般化している。

(5) *He reads books a lot. /彼はたくさん本を読む [オプションあり=(6)]

(6) He reads a lot of books. /彼はたくさん本を読む

(7) He drinks a lot. /彼はたくさん飲む [オプションなし←目的語がないから]

(8) Adverbials as a Last Resort Principle [ALRP]

副詞を使う場合、それが形容詞形で項を修飾できる場合には、そのオプションが優先される。(加藤(2008), (51))

英語では ALRP が on であり、日本語では off であると仮定する。(5)では a lot は副詞であるが、それを形容詞として使うオプションが可能である。そのため、ALRP が on である英語では(5)は許されない。しかし日本語ではそれが off であるため(5)が可能である。

上記の主語化は、この ALRP を(9)のように一般化すれば、日本語と英語の一般的な違いから来る自然な帰結として捉えることができる。

(9) Generalized Adverbials as a Last Resort Principle [GALRP]

副詞を使う場合、それを副詞でない形で使うオプションが許される場合には、そのオプションが優先される。

主語化の事例には、「明確な動作主主語がない」という共通点がある。(9)を通してそれらの例を見直すと、主語位置が空いているため、原文のデ格名詞をそのまま副詞として使うのではなく、副詞を使わないという、英語においてより望ましいオプションとして、デ格名詞を主語として使っている、という解釈が可能になる。日本語のデ格の英訳での主語化は、フィルモア(1968)の次の一般化

一般に「無標の」主語選択は次の規則に従うと思われる。

(54) Aがあれば、それが主語になる。AがなくIがあれば、それが主語になる。それ以外のときは、主語はOである。

フィルモア(1968), p.54

の図式に沿ったものと言える³。ここでは、AがないのでIを主語にしている、ということになる。このフィルモアの一般化は、(1)から(4)の日本語文には適用されていないことに注意されたい。一方、(9)の GALRP はまさにその点を説明対象にしている。フィルモアの一般化と GALRP は互いに補い合うものである⁴。

4. GALRP の「オプションが許される場合」ではない場合

次のような例では明確な動作主主語がある。そのため、GALRP で言う「副詞でない形で使うオプションが許される場合」には当たらない。そのような場合には、デ格の意味役割が主語化がある事例と同じであっても、次のように主語化は起こらない。

■手段

(10) 2016_4_12 甘利氏は、体調がすぐれず、国会に出席できないのなら、弁護士による説明や書面回答など、別の方法で説明責任を果たすことを真剣に検討すべきだ。

If he is in poor health and unable to appear before the Diet, Amari should earnestly consider assuming his accountability through other means, such as having his lawyers give explanations or answering questions in writing.

■イベント・機会

(11) 2016_4_6 安倍首相は衆院本会議で、「TPPを我が国の成長戦略の切り札にしていく」と述べ、加盟の意義を強調した。

At a plenary session of the House of Representatives, Prime Minister Shinzo Abe said, “We’ll make the TPP a key tool of our country’s growth strategy,” emphasizing the significance of Japan’s participation.

5. 機械翻訳での主語化の扱い

主語化のある日本語原文では明確な動作主主語がないことを、上で確認した。そのような文では、英訳で主語をどうするかが当然問題になる。(1)の逐語訳では不定詞を使うことで主語を PRO にするというやり方で主語表示を回避している。(2)と(4)では不特定多数の they を主語位置に入れている。(3)では受動文にすることで動作主主語の表示を避けている。これらの逐語訳は本発表者によるものである。では、機械翻訳ソフトはこれらをどう扱うだろうか。

実際の主語化の事例を単純化し、3つの翻訳ソフト⁵で試してみた。次がその結果である。

(12) 政策的な支援で、企業の背中を押すことも大事だ。

LV : It is also important to push the back of a company with political support.

B : It is important to push the back of the company with policy-like support.

HH : To push the back of the corporation by the political support, too, is valuable.

(13) 3月末に施行された安全保障関連法では、集団的自衛権の限定行使が可能になった。

LV : By the security related law enforced at the end of March, limited use of the right of collective self-defense was attained.

B : By the security-related law enforced in the end of March, the limited use of the right to collective self-defense was enabled.

HH : In the security relevant law which was put at the end of March into operation, the limitation use of the right of collective self-defense became possible.

³ A : 動作主格, I : 道具格, O : 対象格

⁴ さらに、フィルモアの一般化は、手段ではない(3)や(4)は対象外となる。

⁵ LV: 『LogoVista2015』, B: 『翻訳ブレイン3』, HH: 『本格翻訳7』

- (14) 先の主要国首脳会議で、それは世界経済の不安材料とされた。
 LV : It was made into the anxiety of the world economy at the previous summit.
 B : In a former major country summit meeting, it was considered to be uneasy materials of the world economy.
 HH : By the Summit at the end, it was made the discouraging factor of the global economy.
- (15) 公的制度で対応できない部分を地域共生社会によって補う。
 LV : I compensate the portion which cannot respond under the system of public by local convivial society.
 B : I supplement the part which cannot be equivalent in a public system by local symbiosis society.
 HH : It makes up the part which can not correspond by the public system in the area symbiosis society.
- (16) 国会では、具体策について、話し合ってもらいたい。
 LV : In Parliament, I should discuss a concrete plan.
 B : I want you to talk about the concrete measures in the Diet.
 HH : Wanting to have the Diet discuss about the concrete plan.
- (17) 首都圏の私立大学では、給付型奨学金を設けているケースもある
 LV : In the private university of the metropolitan area, there is also a case where I have prepared the granted type scholarship.
 B : At the private university of the metropolitan area, there is the case making a payment type scholarship for.
 HH : There is a case which is providing benefits package -type scholarship, too, in the private university in the metropolitan area.

デ格を *The Japan News* のように主語化している事例はない。しかしそれは翻訳ソフトに対しては求めすぎであろう。(12)は不定詞で主語表示を回避している。(13)と(14)は原文の主語をそのまま主語としている。(15)の下線部では「部分」が関係節内の主語となるような英文になっている。(16)では不適切な主語／目的語を挿入しているか、破綻している。(17)では、(他にも問題はあるが)「設けている」の主語が不適切である。このように、(不定詞を使えるか)原文に主語があれば大きな問題はないが、主語がない場合に課題があることが分かる。(15)から(17)の下線部は、「主語がなく自動詞ではない場合は、目的語を主語にして受動態にせよ」という戦略を採用すれば問題は回避される。

6. まとめ

日本語原文に明確な動作主がない時、プロの翻訳家はデ格の主語化という戦略を用いる。それは、副詞使用に英語では日本語には適用されない制限があることが寄与している。一方、そのような場合は、翻訳ソフトには課題があるが、主語を出さない受動化のような解決策が考えられる。

引用文献

- フィルモア, チャールズ (1968) 「格の症例」, フィルモア著, 田中春美・船越道雄訳 (1975) 『格文法の原理』, 三省堂
- 加藤鉦三 (2007) 「デには『意味』がない」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 No.3, ひつじ書房, 229-314
- 加藤鉦三 (2008) 「日本語結果述語は動作オプション表現である」, 小野尚之編著, 『結果構文研究の新視点』, ひつじ書房, 217-248